

● シリーズ 私の見た日本 Vol.157

新旧の不思議とその矛盾

徐 立偉 (ジョ・リツイ)

台湾台北市出身。
2003年台湾華梵大学哲学部卒業。
2006年～2011年アメリカジョージア州
サヴァンナ芸術工科大学建築学部建築設計
専攻修士取得。
2014年より佐藤総合計画 設計室勤務。
LEED Green Associate



◆初めての来日

大学を卒業し兵役を終えたころ、日本で建築設計の勉強をしようと考えた。だが日本に来て、東京の電車の中でサラリーマンたちが英語の勉強をしているのを見て、私はアメリカ留学を決めた。アメリカの大学院卒業後、ワシントンDCの建築事務所の面接の機会を得たが、家族の事情でアジアでの就職を決めた。私は日本語も話せず、日本文化も知らないまま東京で就職することになった。日本に来ることがどこか運命のようで、昨年日本で結婚した。

◆台湾・日本—不思議なホームシック

台湾で過ごした20数年間とアメリカ留学の5年、そして東京で過ごした数年間。3つの異なった国、空間、街並み、建築の規模の違いに様々な感情が湧きあがる。特に日本で過ごした数年間で見た日本の街並み、空間を見ると不思議とホームシックになる。

◆台北市と東京—街のスケール

私の実家は台北市にある。台北市の路地のスケールは東京より6mも広いのに、路上駐車ができるためか、実際に感じる広さは東京と変わらないか、もっと狭い。実家にいた頃、部屋からは近隣の喧嘩やカラオケの音楽が聞こえた。路地と路地が本当に狭いのだ(写真1)。

◆台北・東京—路地のカラオケ

台北市林森北路六條通りは京都の路地に似ている。林森北路六條通りは日本の居酒屋があるスナック街で知られていて、夕方にはカラオケで演歌を歌う声が聞こえる(写真2)。最近会社の近くでも毎週木曜日の午後からシルバー世代の方たちがカラオケを歌っている。特に“酒よ”という曲は90年代台湾で“傷心酒店”と翻訳され大ヒットした。東京で仕事をしているときにこの曲を聞くと、実家にいる頃、テスト前だというのに近所から聞こえる“酒よ”カラオケの洗礼を受けなければならなかったことを思い出す。あれから20年

が過ぎて日本と台湾、それぞれ時間と空間は異なるが、同じ曲を聞いている。学生だった私は今や社会人。私の特別なホームシックだ。

◆父親の故郷

—日本式の家と千葉館山の街並み

台湾には多くの日本統治時代からの日本式建築がある。最近多くの日本式建築が取り壊されている。父親の故郷斗六には一部日本人が残した木造家屋がある。ところで、日本家屋の横に龍眼とマンゴ、バナナの木がある風景を想像できますか(写真3)。私が留学する前、父が龍眼の木に登って龍眼を摘み、その龍眼を食べるのを見た思い出がある。何年間か前に館山市へ旅行に行ったとき、館山市は海側、斗六は山側にあるのに、なぜか館山市の街並みを見て懐かしさを覚えた。古い家の周りに草木が生えて、日本に居ながら南国情緒をかもしだす。館山市の家々を見て父親の故郷斗六を思い出した(写真4)。

◆新宿副都心と台北市信義計画区

台北市信義計画区は、1970年代日本で活躍していた建築家・郭茂林氏が新宿副都心のコンセプトを台北に取り入れたものだ。1990年代中期、台北市政府(都庁)は信義計画区へ移転し、2004年に台北101が完成した(写真5)。信義計画区には5つ星ホテルと高層ビル群、大手銀行、高級百貨店、高級住宅が次々と建設された。信義計画区は始まってから完成までに30年かかった(注1)。建築密度はそれほど高くなく新宿副都心のコンセプトで進んできたが、雰囲気は新宿とは違う(写真6)。

2003年、初めて東京に来た際、新宿のホテルに宿泊した。当時のタクシーにカーナビはなくドライバーがルーペ片手に地図を見ながらホテルまで連れて行ってくれた。新宿の人口密度と百貨店や夜の繁華街など国際色の豊かさに驚いた。歌舞伎町の中国人、アジア人、路上でアクセサリーを売っていたトル

コ人、西アジア人、ホストや客引き、サラリーマン、国内外の観光客が1つの空間にいる。当時の新宿は魅力的な場所だった。昔は新宿の熱気や賑やかさが好きだったが、今は静かな人ごみの少ない東京駅、丸の内の方が魅力的に感じる。けれど、昨年新宿のゴールデン街へ行き、小さな路地裏にある風情のあるBarや居酒屋を見て、また新宿に対して考えが変わった(写真7)。人が多くゴミゴミしているが、様々な人種、職業を受け入れてくれ自分の空間を必ず見つけられる、人間味のある街だと感じた。一方、台北信義計画区は新しい街と住宅と百貨店、Barやclub全てが高級路線で面白みがない。

日本で就職してから、台北信義計画区が新宿副都心のコンセプトを取り入れたものだったことを初めて知ったが、新宿や信義計画区のとちらに行っても、2つの場所に関連性があるようには感じられない。信義計画区は新宿副都心と幕張副都心の中間のように感じられる、むしろ幕張副都心に似ているのではないだろうか。

◆アメリカフロリダ州ジャクソンビルと千葉幕張副都心—疎外感

幕張副都心には買い物や台湾の友人が幕張のホテルに宿泊しているときに行くことがある。幕張副都心は国際都市と言われ、アメリカの都市構造と似ているように思う。都市がはっきり区画されていて、面積が広い。先月、免許の更新で朝一に幕張副都心を訪れたとき、通勤中のサラリーマンが黒いスーツで列になって高層ビルへと向かっていたが、小さな人影が巨大な高層ビル群へと吸い込まれるのを見て人と建築の比率に違和感を覚えた。そして、通勤時間が過ぎると高層ビルの間にある緑の空間と歩道が寂しく見えた。アメリカの都市計画は車を中心に計画されているが、幕張副都心も車の少ないときはなんだか寂しく見え、アメリカ留学時代、車で2時間ほどのフロリダ州北東の都市ジャクソンビルを思い出す。ジャクソンビルはフ



写真1 / 実家の前(台湾台北市・2016) 写真2 / 林森北路六條通り(台湾台北市・2005) 写真3 / 父の実家(台湾斗六市・2004) 写真4 / 千葉県館山市 2012 写真5 / 信義計画区101ビル(台湾台北市・2007) 写真6 / 新宿の高層ビル群(2016) 写真7 / 新宿ゴールデン街(2013) 写真8 / アメリカフロリダ州ジャクソンビルのダウンタウン(2010) 写真9 / 幕張メッセ(2016) 写真10 / 全米最大の歴史建築都市ジョージア州サバンナ(2007) 写真11 / Jepson center(建築家モシエ・サフディ設計)(ジョージア州サバンナ) 写真12 / ホテルオークラ東京(2012) 写真13 / アメリカ ロサンゼルス・メモリアル・コロシウム(2010) 出典: https://www.wikiwand.com/en/Los_Angeles_Memorial_Coliseum 写真14 / 台南市林百貨店(2016) 写真15 / 斗六市行政記念館 出典: http://yo.xuite.net/info/photo.php?e=0NDznn176AOCjxL6s_p_K0&pid=196915328

ロリダ州最大の都市マイアミまで車で5時間である。平日や週末にジャクソンビルへ向かうときはいつも新鮮な気持ちになった。車社会のアメリカらしいのは道中、車も人も少なく夜はさらに閑散としていて夜は犯罪の温床となるところだ(写真8)。その原因は、ジャクソンビルの住民が休日には郊外のショッピングモールやビーチで過ごすので、ダウンタウンには人がいなくなって閑散となるからだ。アメリカは現在この「郊外繁栄都市問題」を改善しようと、多くの公共交通のインフラストラクチャーと都心の活性化を検討している。もしかすると、幕張副都心もバブル時に計画されたもので、当時はみな車の運転を好み、また国際都市の風景に憧れを持っていたのかもしれない。所々に緑が見え歩道も整備されているが、日本特有の小規模な複合式都市空間が見られない。夕日に照らされたバブル期に建てられた高級大理石の建材のビルや横先生が設計した展示場が少し錆びて見えた(写真9)。ホームシック感はなくただ深い疎外感を感じた。

◆都市の新・旧—複雑な情緒

私は矛盾を抱えた人間だと思う。全米最大の歴史建築都市であるジョージア州のサバンナへ留学したとき、好きなアメリカの歴史建築に囲まれて幸せだった(写真10)。とはいえ私は建築設計を専攻していたので、新しい建築、特に古跡に囲まれた現代建築にも興味があった。サバンナには、カナダの建築家

モシエ・サフディが設計したJepson centerがある(写真11)。日本に来て現代建築に溢れた東京の街並みを見るときなぜかホームシックになる。今でも古い建築に対する興味は強く、昭和時代の東京の下町の雰囲気が好きだからだ。東京は建築の新・旧の変化が早い都市ではあるが、古い建築もまだ多く残っている。こうした新・旧建築の変化が早いのは日本が地震大国である一因があるかもしれない。また日本人の心の故郷である伊勢神宮に関係しているようにも思う。20年に一度遷宮が行われ、古い建築から新しい建築へ遷り変わる。だが、私は時々東京に焦りを感じる。ホテルオークラ東京(写真12)や古い国立競技場のような、建設から100年も満たなくても、人々に多くの感動を与えてきた歴史を刻んだ建築が建て替えることで人々の記憶から段々と忘れられてしまうのではないか。対照的に、1920年代に建てられたアメリカのロサンゼルス・メモリアル・コロシウムは1932年と1984年、この間52年もの間が空いているが、2度もオリンピック会場として活用された。今もなおUSC式アメリカンフットボールのメイン会場として使用され人々に愛されている(写真13)。

日本は古い建築を取り壊す一方で、台湾では日本統治時代からの日本式の建物を残そうとしている。もしかして中国から来た蒋介石政権は台湾の文化や考えを洗い流そうとしたのかもしれない。今、台湾人は記憶の奥

にある美しい建築を残そうとしている、その中には台南市林百貨店(写真14)や斗六市行政記念館などがある(写真15)。

13年前に初めて日本に来てから、アメリカで5年の留学生活を経て、今日本で生活している。日本の生活空間、街並み、民家には時々ホームシックを感じる。日本の街並みは空間と人とを上手く融合するように設計されていて、公共交通機関のシステムも整っている。しかし、新・旧建築の保存や活性化をうまく取捨していくのは容易なことじゃないと思う。古い建築には歴史があり、人々の記憶に留まる。一方、新しい建築は経済発展や新しい建築の技術を実践できる機会でもある。日本にはアジア最先端の技術や都市計画のコンセプトがある。これは台湾やその他近隣諸国の建築のコンセプトや生活空間に影響をもたらすだろう。2020年東京オリンピック前、この巨大都市は日々進化をしている。高齢化が加速している中、東京オリンピック後の東京は、どのように人々に都市の魅力を感じさせられるか。日本はどんな素晴らしいアイデアでこの問題を解決していくのか。近い将来、台湾や近隣諸国が同じ局面に遭遇したときに、日本のアイデアを参考にすることになるだろう。

注1: <http://mail.tku.edu.tw/094152/xy2.htm> (accessed May 30, 2016)